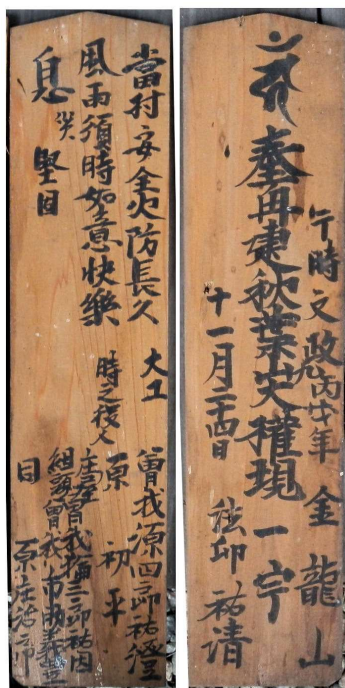


郷土文化財紹介

石造物シリーズ

<常夜灯(石灯籠)>

上野・坂下地区には、高さ3m前後の常夜灯(石灯籠)が、神社境内以外の所で5、6基ほど確認できます。なかなか立派な石造物ですが、どのような性格の物なのか、はっきりとしません。ただ、「秋葉大権現」とか「妙義山」などの銘が刻まれていることから火伏、除災の神との関わりを表しています。もっとはっきりした証となるものがないかと思うなかで坂下神社脇社に祀り込まれた神々と残されている棟札のことに思い当たりました。調べて見ると「愛宕山



大権現」「秋葉山大権現」など火防と関わりのある神社棟札がありました。言うことは、それらを祀る祠があったことになり、愛宕大権現の棟札は、安永3(1774)年から見られます。秋葉大権現の棟札は、寛政11(1799)年からあり、坂下地区町組、下組、合郷と各組の棟札があり

ました。愛宕の祠は合郷若宮神社裏手の通称愛宕山に今もあります。町組の秋葉の祠は、稲荷山にあったようです。小高い山中に祠を設け祭を行い、集落内には常夜灯を建立し火防や災害が起こらないようお願い、火を灯してきたのではないのでしょうか。棟札にみえる願文は、火伏、除災、村中安全が中心です。中には愛宕大権現と金毘羅大権現が共に記された棟札もありました。火難と水難をまとめて祈願したのでしょう。

火防や除災が流行る時代背景もあったと思われます。1700年代半ばからは田沼時代となり寛政の改革を経て1800年代に入りますが、海外からの圧力も加わり世情が目まぐるしく変わります。そんな中で郡上一揆(郡上1754年)、大原騒動(飛騨高山1773年)、三原山大噴火(1777年)、浅間山大噴火(1783年)、天明の大飢饉(1782～87年)、天保の飢饉(1833～39年)、江戸や京都での大火などなどが起こりました。飛信街道と木曽西古道の交差点である坂下の片田舎にも情報はもたらされたと考えます。坂下町史では、宝暦6、7(1756、57)年集中豪雨により後山一帯の大山抜けの災害が取りあげられています。生活苦と不安の募るなかで村役人庄屋と組頭を中心に助け合いを旨とする「講」をおこし苦楽を共にし諸々を相談したと思われます。秋葉山などへは講の代表として2、3人を代参させ村中の安全を願ったのでしょう。

今は、秋葉神社境内にある常夜灯ですが、



↑町組の常夜灯

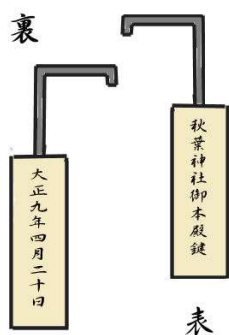
かつては本町筋「新屋」(屋号)の南角にあったと聞いています。この常夜灯について古老にたずねたところ、郷蔵(江戸時代、年貢米を一時保管するための米蔵)との関わりを話されました。本町筋南端の位置に町組の

郷蔵があり、その脇に防火などを願い据えられていたとのこと。大正時代初め木曽電気(株)本社(後の中部電力事務所)が、この郷蔵の跡地に建てられました。常夜灯は向かいにあった警察署前に移動するのですが、この時あらためて再建されたようで

す。常夜灯正面胴部に「秋葉神社」側面に「大正2年10月再建」が刻まれています。この再建された常夜灯が、さらに新屋南角に移されました。そして、昭和40年頃の本町筋道路改修の折に今の秋葉神社境内へ移されたようです。

もう一人の古老から聞いた話ですが、信仰との関わりもあるのでないかと前置きされ、十五夜の月見のことを話されました。十五夜の日、月の出る頃に各家から女衆が子供を連れて常夜灯の位置に集まり、皆で菓子などを食べながら満月を眺め楽しんだそうです。満月の沈むまで留まる人もいたそうです。常夜灯のほどよく照らす明かりがあり、安心して集まり語らえば、お月様への祈りと合わせ気持ちも穏やかになれたことと推察されます。

大正2年に再建された秋葉神社常夜灯に



対して社の再興は少し遅れたようですが、大正9年頃現在地に建立されました。この頃坂下の町は養蚕製糸の好況と賤母発電所建設による賑わいで活気を見せていました。そんな中大正8年坂下神社下

の万歳座は本町筋へ移転され、その跡地に秋葉神社が再建されたようです。そのことを記す秋葉神社の鍵板があり、「秋葉神社御本殿鍵 大正九年四月二十日」とありました。

次に、合郷地区の常夜灯を見てみます。中津川市消防坂下分署脇、川上川に沿い旧道を川上に向かって進むと、右手に小田の酒屋跡があり、斜め前に土蔵と並び立派な常夜灯が2基見られます。1基は「秋葉大権現」とあり文政9年(1826)建立で、高さ280cmほどです。2基目は、「妙義山」とあり弘化2年(1845)の建立で、高さ320cmほどです。秋葉山も妙義山も修験道で有名な地であり、いずれも火防の霊験あらたかな神様とされています。ここに、ど

のような理由で建立されているのでしょうか。これについては、坂下老人クラブ文集「やすらぎ」(平成4年版)に時鐘の吉村誠一さんが「秋葉講妙義講の燈籠由来」と題する一文を載せて見えます。誠一さんの先祖は雲暁(くもきょ)という屋号で、4代



↑合郷の常夜灯

目万平は天明8(1788)年から文化13(1816)年まで、続いて弥十郎が文化14(1817)年から文政12(1829)年まで合郷の庄屋職を務められた名家でした。

この時期に雲

暁の敷地内に常夜灯を建立され、秋葉講と妙義講を先導されたそうです。その講の様子を記す古文書もあり、講が明治の時代まで続いていたことを記されています。

今、これらの常夜灯辺りに立ち見つけているとかすかに古が偲ばれ、常夜灯そのものが参詣の対象となっていたのではないかと思います。

高部の常夜灯は、高部大力の坂を登り詰め、左折し握へ向かう新道の右脇にあります。「秋葉大権現」とあり、寛政12(1800)年建立で明治22年火袋から上が再建されたとあります。高さは280cm程です。秋葉信仰と関わり、火防を祈願しているようです。寛政11(1799)年と記された棟札がありますが、残念ながら集落銘



↑高部の常夜灯

の記載がありませんが、この常夜灯との関わりがあると思われます。慶応4(1868)年の棟札には、「願主西方寺高部両平う中」の記載があるので、どこかに秋葉山の祠があったのでしょう。集落内では火防、安全を願い祠で祭を行い、家々の当番制で火を入れて常夜灯を維持してきたと思われます。

握の古老から聞いたことですが、ここは学校帰りの小学生が遊んだところだそうです。常夜灯の四角い台座部分には、石で叩いてできた穴が幾つも見受けられます。これは、小学生がヨモギなどの草を摘み、石で叩くうちにできた穴だそうです。常夜灯は大きくて目立つので、その下に集まりやすい性格もあるようです。

高部から氷坂を越して外洞に入り堀懸橋を渡った地点は、下外と中外を結ぶ道と堀懸から下林道で高峯山を目指す道の交差点です。この右角に堀懸観音堂があり、境内には15基ほどの石造物が並んでいます。短い階段を昇った所に「秋葉大権現」と刻まれた秋葉信仰の石灯籠があります。他の町内のものと比べると少し小ぶりで、高さは170cm程です。裏面に「大神宮」右

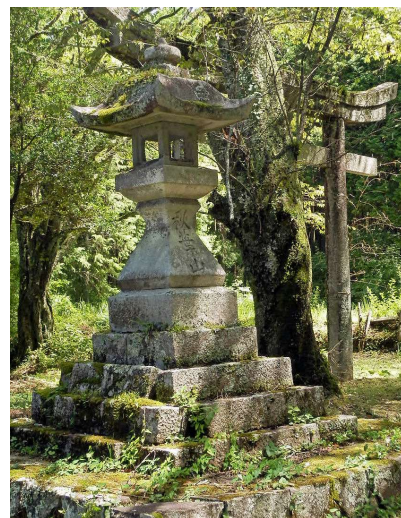


↑ 外洞の常夜灯

面「天保十三壬寅」左面に「三月十日」と刻まれていて、台座には施主12名の名があります。この12名で「秋葉講」を行っていたと考えられます。天保13年は1842年で、この数年前までは天保の飢饉が続き農村は疲弊していました。誰か2人ほどの代表者を決めて駿河の秋葉山へ送り外洞中の安全を願ったのでしょうか。代表者が無事帰着

くまで常夜灯に火を入れ旅の安全を願ったと言われます。

上野本郷から小野沢下野口へ向かう道路右手にかけて芝居小屋新盛座があり、そこは上野白山神社への入口でした。また上野小学校への通学路でもありました。新盛座も小学校も今はなく、白山神社と記された石の大鳥居が残り上野白山神社の祭では神社からこの大鳥居までの神輿の巡行が行われています。この大鳥居の脇に秋葉山と銘の入った常夜灯があります。優に3mを越す大きくて立派なものです。右面には「文化庚午七年庄屋西尾五良兵衛」、裏面には「當村中」、左面には「十一月吉旦」と刻まれています。文化7年は西暦1810年ですので旧坂下村内のものと同年代であり、台座



↑ 上野の常夜灯

の状態から判断すると、移動された形跡を感じさせないので、ここにあり続けていると考えられます。辻の一角にあるようです。宮ノ洞集落と寺尾洞集落を結ぶ旧道の一番高い所で、ここへ本郷集落からの旧道が入ってきています。人の集まりに使われた重要な辻であったのかも知れません。秋葉山の祠がどこかにあったと思われ、明治維新で合祀された上野神社の中にあるのではないかと訪ねて見ましたがありませんでした。